

日医ニュース

2018. 11. 20 No. 1373

発行所 **日本医師会**
Japan Medical Association
〒113-8621 東京都文京区本駒込2-28-16
電話 03-3946-2121(代)
FAX 03-3946-6295
E-mail www.info@po.med.or.jp
http://www.med.or.jp/



トピックス

- 定例記者会見 2面
- 受賞者の功績紹介 4~5面
- 勤務医のページ 8面

毎月2回 5日・20日発行 定価 2,400円/年(郵税共)

日本医師会設立71周年記念式典並びに医学大会

長きにわたり、 医学・医療の発展に貢献してきた功労者を顕彰

記念式典には、堀憲郎日本歯科医師会会長、山本信夫日本薬剤師会会長の他、レオニード・エイデルマン世界医師会長、ラビン・ドラン・ナイデュアツア大洋州医師会連合会長ら、海外からも多くの来賓が出席し、小玉弘之常任理事の司会で開会した。冒頭、あいさつに立った横倉義武会長は、まず、10月にアイスランドで開催された世界医師会(WMA)レイキャビク総会において、世界医師会長

の任期を終えたことを報告。「会員の皆様からの支援の下に、さまざまな活動をさせて頂いた。また、本日、後任として世界医師会長に就任されたエイデルマン イスラエル医師会前会長を始め海外の医師会等からも多くの皆様にご臨席頂き、感謝申し上げる」と謝辞を述べた。

また、最高優功賞を受賞した本庶特別教授が2018年のノーベル医学・生理学賞を受賞するに際し、世界医師会長

の任期中に、日本医師会としても大変誇らしいことである」とした。その上で横倉会長は、「全国の医師会組織は重要なインフラであり、医療は社会的共通資本であることを改めて強く認識し、医療界を挙げて自ら変革に取り組み、未来に対する責任を果たしていく」との覚悟を示すとともに、受賞者の功績に敬意を表した。

来賓あいさつでは、まず根本匠厚生労働大臣(鈴木康裕厚労省医務技監代読)が、本医学大会の意義をたたえた上で、「本庶特別教授に日本医師会最高優功賞が授与される他、基礎医学、社会医学、臨床医学の3分野で日本医師会医学賞が授与され、大変優れた研究成果が全国の医師会員に共有されることは、今後の日本の医学研究や医療の発展にとって非常に貴重な機会と受け止めている」と述べた。

続いて、エイデルマン WMA会長は、「日医が医学教育・医学・医療及び医の倫理における国際的水準を高めるとともに、全世界の人々を対象にしたヘルスケアの実現に努め、世界医師会の使命を果たして来られたことは、称賛に値する」と述べ、横倉会長のWMA会長としての功績をたたえた。

その後、小玉常任理事がその他の来賓者を紹介した上で、表彰式に移り、受賞者に対して、横倉会長から表彰状と記念品目録が授与された。

最後に、受賞者を代表して、馬瀬大助富山県医師会長が、「日医こそが



日本医師会設立71周年記念式典並びに医学大会

日本医師会設立71周年記念式典並びに医学大会が11月1日、日医会館大講堂で盛大に開催された。

当日は日本医師会最高優功賞・優功賞・医学賞・医学研究奨励賞の授与と、併せて長寿会員慶祝者の紹介があった他、ノーベル医学・生理学賞受賞者の本庶佑京都大学高等研究院副院長／特別教授ら受賞者による記念講演が行われた(関連記事4~6面)。



会場の受賞者

来的には免疫療法ががんの治療法の主流になる。がん腫を完全に消すことができないとしても、大きくならない状態が続くこともあるため、ある意味でがんは慢性疾患となり、コントロールする必要がある。また、自身の研究によって生み出されたPD-1阻害薬を用いた治療が、これからはがんの治療法の第一選択になると言える、医師を代表する団体である。横倉執行部が一丸となって事に当たっていることに会員として感謝しており、今後もしっかりと支援していきたい。本日の受賞を励みとし、一層の研鑽に努め、医学の進歩と国民医療の向上に努力する決意を新たにしている」と謝辞を述べた。

「副作用を少なくすることができ、短期間の投与でも長期間、効果が期待できるだけでなく、完治することも期待できる」と述べた。また、臨床現場において、がん



表彰される本庶特別教授

「がんの初期段階で用いた方が効果的である」「手術、化学療法、放射線療法によって免疫力が落ちる前に行う必要がある」と強調。その理由としては、「患者は常に死の恐怖から逃れたいと思っている。人間を幸福にするためにも、優れた医学的治療を行うだけでなく、その不安を和らげることが考えながら医療を続けていくことが重要になる」とし、その実践を求めた。

「患者は常に死の恐怖から逃れたいと思っている。人間を幸福にするためにも、優れた医学的治療を行うだけでなく、その不安を和らげることが考えながら医療を続けていくことが重要になる」とし、その実践を求めた。

引き続き、日本医師会医学賞受賞者による「脳機能を支えるシナプスの機能発達、可塑性および伝達修飾の研究」(狩野方伸東京大学大学院医学系研究科教授)、「大規模コホート研究の推進と日本人のエビデンスに基づいたがん予防法の提言」(津金昌一郎国立がん研究センター社会と健康研究センター長)、「緩徐進行1型糖尿病(SPID DM)の成因、診断、および発症・進展阻止治療に関する研究」(小林哲郎冲中記念成人病研究所)の3講演が行われた。

日医 定例記者会見

10月31日

『日本の医療の グランドデザイン2030』の 概要版が完成



横倉義武会長は、第143回日本医師会臨時時代議員会（6月24日開催）の所信表明（本紙第1365号既報）でも、日医が日本医師会総合政策研究機構を中心として、新たなグランドデザインの作成を進めていることに触れていたが、その『日本の医療のグランドデザイン2030』（以下、『グランドデザイン2030』）の概要版が完成したとして報告した。

概要版が完成

『グランドデザイン2030』は、「第1部あるべき医療の姿」「第2部現状の検証」「第3部日本医師会GD2030へのアクションプラン」の3部構成となっている。第1部は人類のあり方、医療のミッションから、現在の日本のあるべき医療の姿を描くことにも、第2部は現状の医療の認識及び課題の抽出も含まれている。

更に、第3部では、第1部、第2部を踏まえ、あるべき医療の姿を実現するために、日医が何をしていくのかというアクションプランを提示。これは、広義では、人類の生存環境の変化、狭義では、所得、経済、高齢化などの社会変化や医療供給体制の劣化などに対応しつつ、医療者と社会の成員が、医療に課せられ

られるような社会において、医療がいかなる使命を果たすべきか、医療のあるべき姿とは何かを示すために『グランドデザイン2030』を制作したと、その経緯を説明した。 同会長は、「グランドデザイン2030」で取り上げられる項目は、必ずしも全ての問題を網羅しているわけではなく、完成後も必要に応じて、あるべき姿や行動計画の部分に新たな項目を付け加えることもあり得る」とし、進化の可能性を内包したものとされている。

と示唆した。 その上で、現在、第1部の総論と構成、第2部の構成は完成し、それぞれの項目に関する文章を完成中であり、第3部の

在外日本人医師向け支援サービス ネットワーク（JMA-WMN）を 立ち上げ

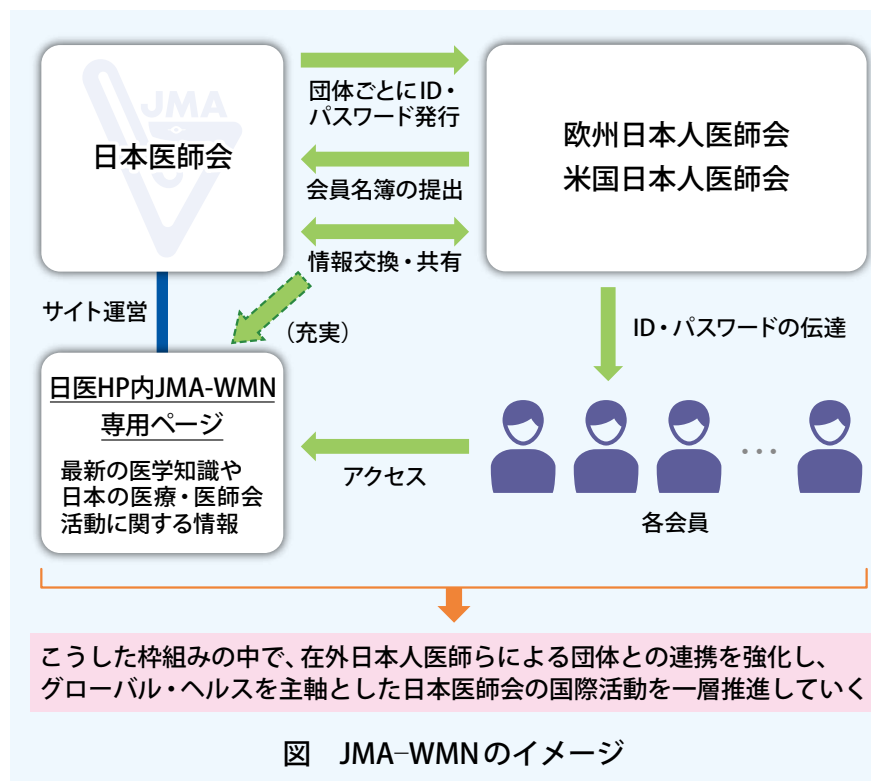


小玉弘之常任理事は、海外で活躍する日本人医師の活動を支援するため、同サービスは、横倉義武会長が世界医師会長と

行動計画の概要は来年1月末、全てが完成するの3月末になる予定との構成は完成し、それぞれ、完成した際には、改めて記者会見等で説明する考えを示した。

立ち上げ

のサービスとして、「日本医師会ワールドメンバーズネットワーク（JMA-WMN）」を立ち上げることを報告し、その概要を説明した（左図参照）。 同サービスは、横倉義武会長が世界医師会長と



して各国を歴訪した際、海外で活躍する日本人医師の方々から、最新の医学知識や日本の医療・医師会活動に関する情報を入手したいという要望が数多く寄せられたことを受けて開始するものである。 具体的なサービスとしては、日医ホームページ内に「JMA-WMN」専用ページを設置し、本サービスの運営に協力してもらう各日本人医師会（サービス開始当初は2団体を予定）を通してID・パスワードを取得し、同常任理事は、「本サービスの運営を通じて、各日本人医師会との関係の深化を図り、グローバル・ヘルスを主軸とした日医の国際活動の一層の推進を図っていきたい」と述べ、本サービスの効果に期待感を示した。

「2020年東京オリンピック マラソン競技のスタート時刻 1時間半繰り上げに関する 要望」を提出



長島公之常任理事は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会に提出した「2020年東京オリンピック マラソン競技のスタート時刻1時間半繰り上げに関する要望」の内容について説明した。 同常任理事は、10月29日、横倉義武会長が、尾崎治夫東京都医師会会長と共に森喜朗東京オリンピック・パラリンピック

ニュースポータルサイト「日医 on-line」では、定例記者会見の映像等、さまざまな情報をご覧頂けるようになっています。ぜひご活用下さい。

<http://www.med.or.jp/nichiionline/>

競技大会組織委員会長らと会談し、選手、大会関係者並びに観客の熱中症のリスクを軽減するためにも、マラソン競技のスタート時刻を実施予定である午前7時から午前5時半に繰り上げの事を求めた他、競歩やパラリンピック競技における熱中症対策についても要望したことを報告した。 また、会談には、松本孝朗中京大学スポーツ科学部スポーツ健康科学科教授も同席し、自らの研究データを基に、①現在予定されているとおり、マラソンが7時にスタートした場合、暑さ指数に

プライマリ・ヘルス・ケアに関する国際会議

新たなPHCに関する国際宣言として「アスタナ宣言」が採択される



「アスタナ宣言」のパネルを持つ国際医学生連盟代表と

府代表、保健医療関連国際機関、団体、アカデミア、市民社会代表ら約2000名が参加した。

宣言には健康のための人的資源の項目で、当初タナ宣言」が採択された。案には言及されていないか

また、横倉会長は、24日には川端一郎在カザフ

ヴァ会長からは横倉会長

等視察した。

横倉義武会長は世界医師会(WMA)への招待に

能な開発目標の達成に向け、1978年9月にソ

ビエト連邦(当時)のア

ルマ・アタで採択された

PHCに関する「アル

マ・アタ宣言」の40周年

を記念して開催されたも

WMAからは他に、レオニード・エイ



カザフスタンのビルタノフ保健大臣と

横倉義武会長は中国医師会より招待を受け、中

の面日に開催された「2

018世界健康大会」に

出席した。

健康寿命の延伸のための

横倉会長 「2018世界健康大会」並びに「中日・医学交流フォーラム」に出席



第2回目となる本大会は、人類の健康と将来の発展をテーマとし、持続可能な人間開発及び社会開発における健康の価値に

あつた65歳から74歳までの高齢者を、社会を支える側にすると構想を説明し、健康長寿を享受できる社会の実現を目指していく決意を示した。



中日友好病院 孫陽院長(左から4人目)、劉鵬副院長(右端)らと

取り組みを紹介。これまで

で社会に支えられる側

横倉会長は、「日本の医療と医師会、中国との

交流を促進する

日本医師会設立71周年記念式典並びに医学大会 受賞者の功績紹介

日本医師会最高優功賞のうち、都道府県医師会会長推薦による「医学、医術の研究又は地域における医療活動により、医学、医療の発展又は社会福祉の向上に貢献し、特に功績顕著なる功労者」と、その受賞理由を紹介する。

学校保健活動に著しく貢献した功労者



大山 宜秀 先生
(72歳 神奈川県)

大学在任中から相模原市医師会において肥満対策に取り組み、児童生徒肥満対策事業の立ち上げに貢献。副会長就任時には、成長曲線を活用した事業や尿糖陽性者検診（小児糖尿病早期発見）事業化など、学校検診体制の構築に寄与した。

また、全小中学校において眼科校医、耳鼻科校医の配置体制を実現した他、精神科等専門校医制度確立（地域児童精神科医療学電話相談事業）に尽力した。

郷土医史学の研究に貢献した功労者



島田 保久 先生
(86歳 北海道)

地域住民の医療確保と健康管理に尽力する一方、明治期以前の蝦夷地の医家について40数年にわたり史料を調査、研究し「蝦夷地醫家人名字彙」を自費出版した。

また、昭和61年には札幌医史学研究会を設立。その後、平成5年には北海道医史学研究会を立ち上げ、代表幹事として、後進の指導的役割を担い医史学の普及に努めるとともに、現在も医史学研究の第一人者として文筆活動を続けている。

脊椎・脊髄疾患及び認知症の研究に貢献した功労者



柳 務 先生
(82歳 愛知県)

昭和50年度厚生省特定疾患後縦靭帯骨化症調査研究班などさまざまな研究に参加し、脊椎靭帯骨化症全般の実態を明らかにした他、変形性頸椎症に伴う新タイプの筋萎縮症の存在を指摘し、臨床に新たな視点を与えた。

更に脊椎・脊髄疾患を対象に多くの関連各科との連携システム化を図った研究体制の構築に尽力した。

また、認知症に関する多くの研究業績を挙げ、近畿・東海北陸・甲信地方の認知症介護指導者の養成をするなど介護福祉の質の向上に貢献した。

がん検診の推進及び医師会組織強化に貢献した功労者



坂本 哲也 先生
(75歳 秋田県)

秋田県の実全医療機関を対象に5年間にわたり、がん検診受診の追跡調査・実態調査を実施した他、地域がん登録事業のフローチャートによる新たな事業実施形態を秋田県に進言し、現在、そのスキルが全検診事業に生かされている。

また、勤務医加入率の向上を目指した勤務医部会の設立や、女性医師の勤務環境の整備を通じた医師全体の環境改善のための会合等の開催により、秋田大学・秋田県・秋田県医師会の連携を深め、組織強化に貢献した。

地域医療・介護支援体制の充実に貢献した功労者



伊藤 勉 先生
(73歳 三重県)

桑名医師会の役員を歴任中、経営が悪化していた桑名市民病院を地域の病院と統合し、地方独立行政法人桑名市総合医療センターとして立ち上げるとともに、「桑名医師会立訪問看護ステーションえがお」を設立。

警察医として検死に携わる一方、桑名警察署の産業医を務めた他、現在も桑名市認知症初期集中支援チーム員として認知症の早期診断、早期対応に向けた支援体制の構築のため活動を続けている。

医師会事業及び学校保健活動に貢献した功労者



故 原 晋二 先生
(89歳 福島県)

いわき市医師会の監事・理事・副会長を歴任し、医療保健福祉の情報ネットワークの構築や医薬分業化等を推奨するなど、30年余にわたり医師会運営と地域医療の向上に多大な貢献をした。

また、昭和46年より中学校の学校医を務め、生徒の突然死を発端に心電図検診の実施を市教育委員会に働き掛けた他、「いわき方式」の心電図検診システムの構築や学校検診の事後管理体制の整備等、児童・生徒の健康増進に寄与した。

医師会事業及び地域医療体制の構築に貢献した功労者



齋藤 信雄 先生
(75歳 京都府)

京都府医師会の理事就任時には、医師の学術研鑽の場を設け、生涯教育システム及び府市民への医療提供体制の充実に尽力した。

また、各病院間の連携の下、基本健診や乳がん検診における検診医の調整、派遣協力を行うとともに、勤務医の地域医療活動への参画に寄与した。更に指導医養成や研修医への支援事業等に尽力した他、医療安全対策システムの構築に努めるなど、地域住民へ安定的に医療を提供するための体制構築に貢献した。

医療分野の情報化の推進に貢献した功労者



小松 満 先生
(72歳 茨城県)

「いばらき安心ネット」の拡充とともに、県医師会と8都市医師会を結ぶテレビ会議システムの構築に尽力した。

また、平成27年には鹿行南部地域夜間初期救急センターを開設するなど救急体制を確立するとともに、医師会主導型の医療ADRとして「茨城県医療問題中立処理委員会」を設置。平成26年に締結した「四師会による災害時の医療救護活動に関する協定」を基に、翌年の関東・東北豪雨の際には被災者支援に尽力した他、市町村ごとに四師会を中心とした多職種連携システムづくりに貢献した。

医師会事業及びがん検診の推進に貢献した功労者



大田 研治 先生
(76歳 兵庫県)

姫路市医師会において、全国に先駆けた地域医療情報ネットワークシステムの構築とともに、住民検診システムの確立や胃がん個別検診を始めとした検査検診事業全般の整備に尽力し、受診率及び精度の向上に多大な成果を挙げた。

また、公衆衛生の普及充実と地域保健の向上に努め、病診・病病の機能連携と市民向けの情報開示システムの推進の他、救急医療体制の再整備など、地域医療活動の推進にも大きく寄与した。

医師会活動を通じて地域医療の発展に貢献した功労者



篠田 伸正 先生
(71歳 埼玉県)

現川口市医師会の役員を歴任中、新型インフルエンザ対策として非常事態発生時における医師会の行動計画を立てるなど、地域住民に充実した医療提供を行う環境整備に努めた。

また、埼玉県医師会の常任理事として、会員医療機関の安定経営と改善のために税制問題に関する研修会の開催や、『埼玉県医師会誌』『埼玉FAXニュース』の編集・発行に携わるとともに、公式ホームページの運営・管理等、会員や県民への情報伝達・啓発に尽力した。

介護・高齢者福祉の推進に貢献した功労者



吉野 俊昭 先生
(83歳 愛媛県)

介護老人保健施設を開設後、今治市からの委託を受け、在宅介護支援センター及びホームヘルプサービス事業を開始した他、今治市初の老人訪問看護ステーションや特別養護老人ホームを開設するなど地域の保健・医療・福祉の連携と充実を図ってきた。
また、愛媛県老人保健施設協議会会長・全国老人保健施設協会愛媛県支部長として、老健施設の定着と発展に努めるとともに、愛媛県老人福祉計画の策定に参画するなど、介護事業の発展に貢献した。

医学の発展及び地域医療の向上に貢献した功労者



猿田 隆夫 先生
(76歳 高知県)

『高知市医師会医学雑誌』の創刊以来、編集・発行に尽力。「医師会は学術専門団体であり、会員の医学の知識と技術の習得へ貢献しなければならない」という強い信念の下、医学、医術の発展に寄与した。更に日医Libにも掲載する等、全国に向けた情報発信に努めた。
また、32年にわたり、医療活動を通じ地域住民の健康管理、保健衛生の向上に携わるとともに、市民・県民向けのフォーラムを開催する等、住民の健康の保持・増進の意識の向上に貢献した。

地域医療・介護支援体制の充実に貢献した功労者



宮崎 良春 先生
(70歳 福岡県)

福岡市中央区医師会長、福岡県医師会理事、福岡市医師会会長を歴任。福岡県医師会では、医療モニター「メディベチャ」を企画し、医師と患者の相互理解の深化に尽力した。
福岡市医師会では、地域連携パス（脳血管障害・大腿骨頸部骨折）を策定した他、市内の地域包括支援センターの半数を医師会が受託し、その事業運営に寄与した。
また、泌尿器科診療医として介護職員への講習や市民公開講座を開催する等、排泄ケアの知識・技術の普及啓発に貢献した。

医師会事業及び救急医療体制の整備に貢献した功労者



江畑 浩之 先生
(70歳 鹿児島県)

12年にわたり鹿児島県医師会の役員を歴任。「医師の心得」を作成し、会員の資質向上に努めるとともに、医療安全対策研修会による医療機関の安全管理の確保等、医療・保健・福祉の発展に寄与した。
また、川内市医師会役員として、医師会病院の建て替えに携わり、病院の健全な経営及び発展に尽力した他、救急輪番医療機関の医師が相談する緊急電話連絡体制や「川内市医師会災害医療救護計画」の整備などにも貢献した。

医師会事業及び学校保健活動に貢献した功労者



岸本 幸治 先生
(84歳 沖縄県)

那覇市医師会の理事、常任理事、副会長、監事を務める中で、医師会事業の発展強化に尽力した。
那覇看護専門学校の新築移転及び正看護師2年課程の新設に携わるだけでなく、教職員の能力向上のための研修会、講演会を行うなど、看護教育に大きな功績を残した。
また、29年の長きにわたり、中学校の学校医として生徒の健康管理、健康教育並びに疾病予防に努め、現在でも定期学校健診に従事する等、地域において活躍している。

医師会事業及び救急医療体制の整備に貢献した功労者



青山 信房 先生
(81歳 奈良県)

長年にわたり脳神経外科医として地域住民の健康保持増進に寄与。橿原地区医師会では、勤務医の相互連携や医師会への加入率向上に取り組むなど、医師会の組織強化に尽力した。奈良県医師会では、救急医療に関する諸問題の情報共有に努め、勤務医、労災・自賠責保険の担当理事として精力的に医師会活動に取り組んでいる。
また、自院においても年間1,500件を超える救急患者を受け入れ、地域の救急医療体制の向上と確保に貢献している。

へき地医療活動に著しく貢献した功労者



井上 晃 先生
(83歳 島根県)

厳しい医療環境の中、地域住民の健康を守るための予防活動並びに医療サービスの維持・向上など、へき地診療に寄与するとともに、総合病院との連携を密にすることで、高度医療サービスの提供を目的とした病診連携を構築し、地域医療の充実、発展に尽力した。
また、多年にわたり、幼稚園の園医や小・中学校の校医を務める一方、仁多郡医師会、雲南医師会及び島根県医師会の役員等として会務に参画し、医学・医術の振興にも貢献した。

医の倫理の実践及び救急・災害医療に貢献した功労者



真田 幸三 先生
(87歳 広島県)

「医療苦情相談窓口」を全国に先駆けて開設するとともに、医の倫理の向上、医事紛争防止への強化策として、広島県医師会独自の診療情報の提供に関する事業の推進に尽力した。
また、救急救命士が活用する各種プロトコル、検証票、教育カリキュラムの作成やメディカルコントロール担当医師に対する養成事業など先駆的な取り組みの他、災害発生時における情報伝達体系の整備を行う等、災害時の医療救護体制の構築にも多大な貢献をした。

医学の発展及び地域医療体制の充実に貢献した功労者



江里 健輔 先生
(79歳 山口県)

山口大学で国立大学初の先進救急医療センターの設置や救急外来の新設等に取り組んだ他、山口県立中央病院院長就任時には、へき地支援機構を設置する等、医療環境の改善、地域福祉の向上に努めるとともに、セカンド・オピニオン外来や患者等からの無料メール相談の開設や看護職員等の養成にも尽力した。
また、「自分の体は自分で護る」をキーワードに、講演活動や地方紙を通じ、地域住民の疾病予防、健康増進等、公衆衛生の向上にも貢献した。

医師会事業及び学校保健活動に貢献した功労者



有住 基彦 先生
(76歳 徳島県)

板野郡医師会員の功績を称える表彰規程の策定や会員向けの情報提供・勉強会の開催等、会員の融和と団結に努めるとともに、徳島県補助事業「在宅医療連携拠点事業」への参画、板野郡5町の委託事業「在宅医療・介護連携事業」の受託など、在宅医療の推進に尽力した。
また、臨床医として地域医療を支えながら、昭和62年から現在にわたり、小学校の学校医として、学校保健活動を通じた児童・生徒の健康管理の向上に寄与している。

日本医師会設立71周年記念式典並びに医学大会受賞者一覧

日本医師会最高優功賞

◇在任6年日本医師会役員

- 今村 定臣（長 崎）（12年）
- 鈴木 邦彦（茨 城）（8年）

◇通算6年日本医師会役員及び都道府県医師会会長

- 尾崎 治夫（東 京）

◇在任6年都道府県医師会会長

- 馬瀬 大助（富 山）

◇医学、医術の研究又は地域における医療活動により、医学、医療の発展又は社会福祉の向上に貢献し、特に功績顕著なる功労者（都道府県医師会会長推薦）

- 郷土医学の研究に貢献した功労者
鳥田 保久（北海道）
- がん検診の推進及び医師会組織強化に貢献した功労者
坂本 哲也（秋 田）
- 医師会事業及び学校保健活動に貢献した功労者
故・原 晋二（福 島）
- 医療分野の情報化の推進に貢献した功労者
小松 満（茨 城）
- 医師会活動を通じて地域医療の発展に貢献した功労者
篠田 伸正（埼 玉）
- 学校保健活動に著しく貢献した功労者
大山 宜秀（神奈川）
- 脊椎・脊髄疾患及び認知症の研究に貢献した功労者
柳 務（愛 知）
- 地域医療・介護支援体制の充実に貢献した功労者
伊藤 勉（三 重）
- 医師会事業及び地域医療体制の構築に貢献した功労者
齋藤 信雄（京 都）
- 医師会事業及びがん検診の推進に貢献した

功労者

- 大田 研治（兵 庫）
- 医師会事業及び救急医療体制の整備に貢献した功労者
青山 信房（奈 良）
- へき地医療活動に著しく貢献した功労者
井上 晃（島 根）
- 医の倫理の実践及び救急・災害医療に貢献した功労者
真田 幸三（広 島）
- 医学の発展及び地域医療体制の充実に貢献した功労者
江里 健輔（山 口）
- 医師会事業及び学校保健活動に貢献した功労者
有住 基彦（徳 島）
- 介護・高齢者福祉の推進に貢献した功労者
吉野 俊昭（愛 媛）
- 医学の発展及び地域医療の向上に貢献した功労者
猿田 隆夫（高 知）
- 地域医療・介護支援体制の充実に貢献した功労者
宮崎 良春（福 岡）
- 医師会事業及び救急医療体制の整備に貢献した功労者
江畑 浩之（鹿児島）
- 医師会事業及び学校保健活動に貢献した功労者
岸本 幸治（沖 縄）
- ◇日本医師会会長特別表彰者
- 新しいがん免疫療法原理を確立するとともにその医療への展開により人類の福祉に著しく貢献した功労者
本庶 佑（京 都）

日本医師会優功賞

◇在任10年日本医師会代議員

- 松家 治道（北海道）

◇在任10年日本医師会委員会委員

- 鹿毛 雄二（東 京）
- 田村 正雄（東 京）
- 温泉川 梅代（広 島）（11年）

◇都道府県医師会会長退任者

- 徳永 正靱（山 形）
- 田畑 陽一郎（千 葉）

日本医師会医学賞

- 脳機能を支えるシナプスの機能発達、可塑性および伝達修飾の研究
狩野 方伸（東大・神経生理学）
- 大規模コホート研究の推進と日本人のエビデンスに基づいたがん予防法の提言
津金 昌一郎（国立がん研究センター社会と健康研究センター）
- 緩徐進行1型糖尿病（SPIDDM）の成因、診断、および発症・進展阻止治療に関する研究
小林 哲郎（沖中記念成人病研究所）

日本医師会医学研究奨励賞

- 慢性炎症における肺線維化機構の解明と病態制御基盤の構築
平原 潔（千葉大・免疫発生学）
- 臓器間連携を介した新規心臓恒常性維持機構の解明による新規診断・治療法の開発
藤生 克仁（東大・先進循環器病学）
- 健康長寿を目指したアンドロゲン受容体を介する遺伝子発現制御機構の統合的同定解析
高山 賢一（東京都健康長寿医療センター研究所）
- ヒト新生児が有する脳傷害後のニューロン移動メカニズムの解明と再生促進の実現化
神農 英雄（名市大・新生児・小児医学）
- 大腸癌転移における炎症性サイトカインの機能解析
谷口 浩二（慶大・微生物学・免疫学）

- シングルセルRNAseqを用いた角膜移植における制御性T細胞の可塑性の解析
猪俣 武範（順天堂大・眼科学）
- 行動科学理論に基づく情報通信技術を活用した健康格差是正手法の開発と効果検証
近藤 尚己（東大・健康教育・社会学）
- 災害医療情報の国内・国際標準化
久保 達彦（産業医大産業生態科学研究所・環境疫学）
- 光曝露の健康影響：大規模前向きコホート研究による検証
大林 賢史（奈良県立医大・疫学・予防医学）
- 細胞死からみたアレルギー性気道炎症の新しい評価法の確立
植木 重治（秋田大・総合診療・検査診断学）
- 治療難治性癌に対する脂質メディエーター標的治療の可能性の探索
永橋 昌幸（新潟大・消化器外科学）
- 「希少がん」骨軟部腫瘍のがんプレジジョンメディシンデータベースに基づいた新規治療法開発
末原 義之（順天堂大・整形外科）
- 嗅上皮障害後の修復過程におけるインスリンの役割の解明
菊田 周（東大・耳鼻咽喉科学）
- 初期胚発生の遺伝子発現機構を介した胚性の不妊症の病態解明と再生医療の開発
山田 満稔（慶大・産婦人科学）
- 皮膚線維化疾患におけるγRNAの関与の研究
神人 正寿（和歌山医大・皮膚科学）

白寿会員

- 橋本 行夫（北海道） 他61名

米寿会員

- 大浦 武彦（北海道） 他884名

平成30年度（第49回）全国学校保健・学校医大会

「子どもは国の宝。次代を担う子どもたちの健やかな成長を願って

～学校医の果たす社会的意義～」をメインテーマに開催



開会式のあいさつで横倉義武会長（今村副会長代読）は、「今後、人生1000年時代を迎える中で、健康寿命の更なる延伸が重要なためにも予防・健康づくりに向けた取り組みが必要である」と述べるとともに、少子化対策や子育てを社会全体の問題として捉え、産みやすく、育てやすい社会をかりつけ医が中心となつてつくり上げていくことの重要性を強調した。

また、鹿児島県医師会からの日医に対する「学校医宣言」の制定に向けた提案が了承された他、文部科学省より学校保健の最新情勢についての報告が行われた。

午後からは、まず、開会式と表彰式が行われ、今回の受賞に対する感謝と、子ども達からだと心を守るために更なる研鑽を誓う旨の謝辞が述べられた。

シンポジウム「次代を担う子どもたちの健やかな成長・発達のために『考えよう』学校医の果たす役割」

引き続き、「次代を担う子どもたちの健やかな成長・発達のために『考えよう』学校医の果たす役割」をテーマとしたシンポジウムが行われた。「ヘルスプロモーション」の理念に立ちかえり、改めて学校医の役割を考へる」と題して基調講演を行った池田鹿児島県医師会長は、ヘルスプロモーションの定義に関する歴史的経緯を紹介。改善のためのアプローチの対象が個人から社会環境等に

変化しているとした他、「自分の健康は自分で守る」という認識を得るための教育の必要性も強調した。

その上で、「これから学校医は、従来の『学校健診』『健康相談』に加え、『健康教育』に更なる力を注ぐことを求められる」と述べ、教育現場における学校医のより一層の関与を求めた。

4人のシンピジストによる発表では、まず、松崎美枝文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課健康教育調査官が、主に「保健室利用状況に関する調査（平成28年度調査結果）」について、養護教諭は多様な心身の健康問題に対応していることなどを示すとともに、特にアレルギー疾患の対応に関しては全ての学校で取り組まなければならない

ことや開催後のフォロー等が課題との認識を示した。

増田彰則医療法人増田クリニック院長は、アンケート結果や自身の診療経験を基に「子ども達の睡眠不足とメディア漬け対策」について解説した。同院長は、「メディア等の依存症になってからは治療が非常に困難であり、通院も続かないことが多い」として、予防の重要性を強調。ゲームやメディア依存の低年齢化や睡眠への影響等を説明した上で、大人や親の問題も大きいとした。同時に、この問題は家庭での取り組みだけでは限界があるとして、「学校・PTAや医療関係、更には業界や国が本格的に取り組み時期ではないか」と提言した。

シンポジウムの後、歴史家・作家の加来耕三氏による特別講演等が行われ、大会は終了となった。参加者は594名。

平成30年度（第49回）全国学校保健・学校医大会（日医主催、鹿児島県医師会担当）が10月27日、「子どもは国の宝。次代を担う子どもたちの健やかな成長を願って」を学校医の果たす社会的意義をメインテーマとして、鹿児島市内で開催され、日医からは、今村聡副会長、道永麻里常任理事が出席した。

午前には、「からだ・こころ（1）『心臓・腎臓・尿糖、成長曲線、その他』」「からだ・こころ（2）『運動器、生活習慣病』」「からだ・こころ（3）『こ

学校保健活動に対する長年の貢献を顕彰

午後からは、まず、開会式と表彰式が行われ、国民の健康の基礎づくり

また、学校保健分野は、国民の健康の基礎づくり

表彰式では、長年にわたり学校保健活動に貢献し、当日出席した九州ブロックの学校医（6名）、養護教諭（7名）、学校関係者（8名）に対して、今村副会長が表彰状と副賞を、池田琢哉鹿児島県医師会長が記念品を、それぞれ贈呈。受賞者を代表して今村正人氏

から、今回の受賞に対する感謝と、子ども達からだと心を守るために更なる研鑽を誓う旨の謝辞が述べられた。

シンポジウム「次代を担う子どもたちの健やかな成長・発達のために『考えよう』学校医の果たす役割」

引き続き、「次代を担う子どもたちの健やかな成長・発達のために『考えよう』学校医の果たす役割」をテーマとしたシンポジウムが行われた。「ヘルスプロモーション」の理念に立ちかえり、改めて学校医の役割を考へる」と題して基調講演を行った池田鹿児島県医師会長は、ヘルスプロモーションの定義に関する歴史的経緯を紹介。改善のためのアプローチの対象が個人から社会環境等に

変化しているとした他、「自分の健康は自分で守る」という認識を得るための教育の必要性も強調した。

その上で、「これから学校医は、従来の『学校健診』『健康相談』に加え、『健康教育』に更なる力を注ぐことを求められる」と述べ、教育現場における学校医のより一層の関与を求めた。

第5回 医師たちによるクリスマス・チャリティコンサート

鑑賞者募集中

- 日時：12月16日（日）12:00開場・12:30開演
- 場所：日医会館1階大講堂
- 入場料：無料（ただし、当日、会場に募金箱を設置し、寄付を募る）
※寄せられた募金は、国境なき医師団日本（認定NPO法人）及び難病の子どもや家族を支援する団体へ寄付を予定。
- 申込方法：鑑賞希望者は、日医ホームページ（メンバーズルーム）から専用申込用紙をダウンロードするか、必要事項①郵便番号②住所③氏名④参加人数⑤電話番号⑥FAX番号（FAXで申し込みをする方のみ）を漏れなく記入の上、「クリスマス・チャリティコンサート鑑賞希望」と明記し、FAX、メール、郵送のいずれかの方法により申し込み願いたい。
申込者には順次、人数分の入場券（ハガキ）を送付する。
- 申込締切：12月12日（水）必着
（ただし、希望者多数の場合は先着順とし、定員になり次第締め切る。）
- 【出演ユニット】合計7組 ※出演順
- 前半＜ポピュラー部門＞3組
 - 三野原 元澄（福岡県）
 - & So On（福岡県）
 - Liebe Parze（岐阜県）
- 後半＜クラシック部門＞4組
 - 東京ドクターズカルテット（東京都）
 - 奏歌＜SOUKa＞（兵庫県）
 - OASIS（宮崎県）
 - 小田原医師会合唱団（神奈川県）
- 【オープニング・アクト】
 - 富士学苑中学高等学校 ジャズバンド部
 - ～ Moon Inlet Sounds Orchestra～
- 【ゲスト演奏】新垣 隆（ピアニスト）
- 【司会】濱中 博久（元NHKアナウンサー）
- 申し込み・問い合わせ先：
 - 日医年金・税制課 クリスマス・チャリティコンサート係
 - <電話> 03-3942-6487（直） 平日9:30～17:00
 - <FAX> 03-3942-6503
 - <メール> xmascc@po.med.or.jp
 - <郵便> 〒113-8621 東京都文京区本駒込2-28-16
 - ※未就学児童の入場は、ご遠慮下さい。

勤務医のページ

初雪の頃

札幌徳洲会病院副院長／プライマリセンター長
中川 麗

私が、札幌徳洲会病院で非常勤の救急当直を開始したのは、2010年のことである。「先生が来てくれると、3日間連続、家で眠れるんだ」と満面の笑みの院長に言われ、衝撃を受けた。

当時は、人手不足から、院長が2日に1回ペースで救急当直に入るような状況だった。多くの場合、夜間10台前後の救急車と10人前後の患者を受け取るため、あまり仮眠をとることもできない仕事をこの頻度で年単位続けている。ごま塩頭の院長が、同じ札幌にいる。シヨックだった。

その頃の私は、初期・後期研修を終えた後、専門科も常勤先も決められ

ず、人生の迷子になっていた。研修時代に出会い、成長を温かい目で見守ってくれていた患者さんごと受け入れて下さるクリニックに恵まれ、細々医学の勉強も続けていた。しかし、北海道大学教育学部修士課程に籍を置かせてもらえたのをいいことに、キャンパスの小川のほとりで日向ぼっこをしたり、10歳年下の同級生達とテニスをして……現実逃避まっしぐらだった。

ひとしきり豪遊し、数カ月が経過したある日の外来、3回挿管させて頂いた患者さんから言われた。「あんなに練習させてあげたのに、もう救急当直しないの？先生は救急とか病棟にいた方が似合ってるよ」と笑われた。後ろめたさから、救急当直のバイト先を選んだのが、札幌徳洲会病院だった。

正直、後悔した。久しぶりの救急診療、初めてのバイト当直の疲れは2日とれなかった。しかし、2回目の当直明けに、3日連続家で眠ることができると喜ぶ院長の満面の笑みを見て、辞められなくなった。

当直明けに回診をして

みた。日向ぼっこ中にとりと気になった患者さんに、テニスの前に会いに行くようになった。そのうち、現れる時間帯に合わせて看護師さんが一緒に回診してくれるようになり、研修医が待っているようになった。ちょっとずつ、病院に置くものが増えていった。着替える置き、歯ブラシを置き、シャンプーを置き……気づいたら、常勤になり、名札に院長と書かれていた。そして、院長が退職し、一人医長としてプライマリ科（救急総合診療科）に残された。

正直、苦悩した。このまま続けるべきだろうか。私には、経験も知識も気概も無かった。何よ、自信が無かった。辞めて、プライマリ科そのものを潰した方がいいのではないかと思った。ただ、私は優柔不断だった。専門科も常勤先も能動的に選ぶことができなかったように、辞めることもできなかった。年に数回、洗濯のために帰った時にうっかり寝てしまった時以外は病院に住んだ。毎日、目の前のことに必死になるという新たな現実逃避を続ける中、ただ時間は過ぎていった。

そんな中、ちょっと変わった研修医が入職した。西條先生だ。たまにたつもりはないが、プライマリ科に残りたいと言ってくれた。しかし、迫

り来る現実には彼の表情は暗くなり、ある日、言われた。「先生は、目先のことで一喜一憂しながら今を生きてくだけでいいかも知れませんが、僕は普通に家庭も持ちたいし、先のことも考えたい」。正直、凶星だった。私は未来を見ることを恐れていた。足元に集中することで一歩進むのに一杯だった。

勇気を振り絞って顔を上げてみた。そこには、たくさんの差し伸べられた手があった。北海道医師会勤務医部会若手医師専門委員会に参加させて頂き、メンターとして支えて下さる方々との出会いがあり、徳洲会グループ内でもさまざまな研修会に参加させて頂いた。ちょうど、医師の働き方改革を推進している時期でもあり、アイデアと支援がたくさん届けられた。

何より、心強かったのは、コメディカルの存在だ。看護師と一緒に決断し、責任を感じてくれる戦友だ。リハビリ専門職や薬剤師、検査技師たちはおのおのの分野でオピニオンリーダーとして活躍する非常にアカデミックな集団であり、私達のブレインだ。そして、事務は、法制度のコンプライアンスについて熟知し、プライマリ科ならではの複雑な事務処理や社会的な支援の調整、病院間連携を率先して行ってくれる。

特にメディカルスタッフは、業務負担を大幅に改善させ、診療の質を上げてくれた。ディクテーション、各種書類の記載などほとんどのデスクワークを担担してくれた。2年間で医師の労働時間のうちデスクワークが占める割合は59%から23%へと大幅に改善された。そして、主な診療疾患の退院時情報提供書の記載割合も40%から93%へと改善された。週60時間以下の勤務となった。

医師は少ないし、確保できる人も立たなかったが、他職種のサポートは厚かった。そして、患者さんにも恵まれた。プライマリ科の体力と度量に合わせた限られた医療

の提供を理解し、譲り合って利用してくれた。あれから8年、今、プライマリ科はプライマリセンターと呼ばれるようになった。年間約5000台の救急搬送と約5000人の外来受診、約1500人の入院患者の診療を担う。西條先生は、公私共に育児ノイローゼだ。赤ちゃんが生まれ、そして、若手医師にも恵まれるようになった。おじいちゃんそっくりな夜泣きする娘アカリと、個性豊かな6人の常勤医、非常勤医師11人、研修医4人が、西條先生を悩ませる。国籍も母国語も描く未来もさまざまだ。悩みは質は変わった。つま先にひっかかる段差

に一喜一憂する日が無いとは言わない。だが、今、私達は、未来も見て悩んでいる。

患者さんがプライマリセンターをハブ空港として人生のギアチェンジをするように、医師もまたここで応急処置を受け、癒やされ、鍛えられ、飛び立つ。それぞれの描く理想的な未来を応援しつつ、このハブ空港で雨宿りする人々に現実的に可能なことを提供する。そのバランスをどこに置くのか。これからもたくさんの方々に指導頂きながら、新しく出会う仲間達と悩んでいきたい。そして、その先築けるもの

が、アカリ世代の満面の笑みでありますように。しかし、仲間が増え、明るい未来を感じる悩みは嬉しい悲鳴だけではなく。西條先生に、「白髪増えましたね」と、からかわれることが増えた。そう言う西條先生の頭からもう少し我慢の季節。本当の春は、まだ先なのかも知れない。

勤務医のひろば

働き方改革と医療プロフェッショナルリズム
国立病院機構仙台医療センター副院長 鶴飼 克明



人数で対応している診療科にとっては、労働基準法36条に基づく労使協定（36協定）という現実が大きく立ちほだかっている。診療を制限するか、医師数を増やせば解決できるであろうが、いずれもそうは容易くない。

タスク・シフティング、シェアリング、シフト制などなど議論はなされているが、果たして特効薬となるであろうか。

研修医や専攻医教育においても切実である。自己研鑽と労働の線引きが曖昧であるので、自己研鑽に重きをかければラックとされ、労働に重きを置けば36協定が障壁となる。

読者の多くは、このプロフェッショナルリズムを、実際の現場体験を通して醸成してきたのではなからうか。例えば、寝食を忘れて常に患者に寄り添った先輩、医療過疎地に身を投じた同僚など、献身的かつ利他的な医師の姿をロールモデルにして。

さて筆者が危惧するのは、働き方改革の研修医や専攻医教育への影響である。とりわけ医療プロフェッショナルリズムの後退である。確かに医師も労働者である。しかし、プロフェッショナルである単なる職業専門職ではない、と筆者は信じている。



西條先生と西條先生の奥さん（看護師）、アカリ、筆者